
南国少年パプワくん アスラクライン

黒也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南国少年パプワくん アスラクライン

【ZPDF】

Z69061

【作者名】

黒也

【あらすじ】

アスラクラインと南国少年パプワくんを混ぜました。あくまでも原作と似ていたり似ていらない部分もありますがご理解ください。

ひとつもパプワ島に冬流ちゃん

橘高冬流、元G.D最強と呼ばれたが彼女は、双子の姉・橘高秋希をアスラ・マキイーナベリアル・ドール起動魔神鉄の副埋葬処女を失った。

副埋葬処女は、起動魔神の動力源の核である。

しかし…その代償は、起動魔神の力を使う度に彼女達副埋葬処女は、感情をすり減らし魂が消滅する事だった。

「アキちゃんああああああああんんん！！」

次の日、橘高秋希の葬式が執り行われた。

秋希の名前を呼びながら泣き叫んでいたのは、秋希と冬流の父親の橘高マジック・ガンマ団総帥である。

「つー」

冬流は、涙をこらえて橘高家から出て行つた。

「秋希…」

「冬流…」

「貴也…」

冬流は、亞稀が死んだ砂浜の近くの崖にいた。

冬流の後ろには、Gロの指令である塔貴也だった。

「秋希が死んだ場所に居たんだ…」

貴也は、悲しい瞳で冬流を見た。

「『めんなさい… 私だけじゃ無く貴也も悲しいのよね…』

冬流は、尻目に溜まつた涙を手で拭いた。

「冬流、実は、話があるんだ！」

貴也は、真剣な顔で冬流を見た。

「実は…」

数日後

ウイイイイイン

ガンマ団本部の中で緊急警報装置が鳴り響いた。

「どうしたんだ！？」

警備室に居たガンマ団隊員が鳴り響いた原因を仲間に聞いた。

「大変です！冬流様が秘石を持つて逃走しました！」

「何だと…？」

モニターを見るとガンマ団本部の廊下を冬流が秘石を盗んで逃走していた。

「…？」

田の前に壁があり行き止まりに成った。

力チャヤ！

冬流は、肩に背負つて居る愛刀『冬櫻』を構えた。

「冬櫻抜刀！」

ズバッ！

壁がまるでバターを切る様に切断され海が見えた。

ヒュウッ！

冬流は、真下の海に落下した。

スタッ！

真下には、計画をしていたのかポートがあった。

ブウウウウウ！

冬流は、無事ボートに着地するとボートを使い逃走した。

「ふふふ…上手くいったわ。」の石を使えば、秋希を生き返す事も出来るのね！」

実は、数日前に貴也から秘石の力と点火装置と呼ばれるアイテムが有れば秋希を蘇らせる事を教え、そして秋希と冬流の弟の小太郎がガンマ団の最深部に隔離されていた。

「後は、ガンマ団から何とか逃げるだけね。（待つていて秋希生き返らせてあげるから。小太郎必ず連れ戻すから。）」

バツバツバツバツバツバツ！！

?

冬流は、空を見るとガンマ団のヘリが追いかけて来た。

ダツダツダツダツダツダツ！

ドカーン！

ポートは、爆発してその衝撃で冬流も海に秘石と冬櫻と共に落ちた。

(私……死ぬのかな？……)

冬流は、海中の内で氣絶した。

ザザザ…

ある島の浜辺に冬流は、流れ着いて倒れていた。

スタッスタッスタッスタッ！

浜辺に何かがやつて來た。

倒れている冬流のバッグに手を伸ばし拾い上げた。

拾い上げたのは、小学校2年生位の少年で隣に犬がいた。

「えーさ、餌！えーさ、餌！」

少年は、ルンルン歩きで踊り犬も一緒に踊った。

「チャッピー餌！」

「わう！ カブ！」

チャッピーと言う犬が冬流の頭を噛んだ。

パチン！

冬流の目が開き次の瞬間…

「うわああああ…！」

チャッピーの噛んだ痛みで目を覚ました。

「此処は！？バッグは！？バッグは！？」

冬流は、周りを見て探してもバッグが無かつた。

「ん！？」

後ろを見ると少年がバッグを持っていた。

「君…お願いだからそのバッグをよこして…」

冬流は、少年に頼んだ。

「…

少年は、素早く冬流の頭に踵落としをした。

「誰が君だ！パプワと言つれつきとした名前があるわい！」

踵落としされて頭を抑える冬流にパプワが答えた。

「いた…仕方ない。こうなつたら！」

冬流は、肩に背負つている冬櫻を構えた。

「冬櫻抜刀！」

冬流は、パプワに向かって冬櫻を抜いた。

「キャッチ！」

ガシッ！

「！！」

冬流は、パプワが自分の技をたつた一本の指で真剣白刃取りをした事に睡然とした。

ヒヨイー！

パプワは、二本の指で掴んだ冬櫻を冬流から奪い何処からか2Bの鉛筆を取り出した。

しゃか、しゃか、しゃか、しゃか、しゃか

パプワは、冬櫻を使い鉛筆を削つた。

「ふふふ今時の若いモンは、鉛筆も削れまい。」

「シャーペンがあるわよッ！」

冬流は、パプワに突っ込んだ。

「冬櫻を奪われたなら拳で！」

冬流は、パプワに拳を放つたが…

グオン！

冬流の拳にパプワが持っていた非常に固い椰子の実が当たった。

パ力

冬流の拳で椰子の実は、割れた。

「ツ~~~~~！」

冬流は、涙目になり痛みをじられた。

「う~ん 中の汁がトロピカール トロピカール 」

チャッピーとパプワは、冬流が割った椰子の実のジュースを味わった。

「ね……ねえ……僕……お願いだからバッグ返してもらえないかな?」

冬流は、椰子の実で青あざに成った右手をパプワに向けた。

「ホレー！」

「あつーーーありがとうーーー！」

冬流は、バッグの中を見ると秘石が無くなっていた。

「えつーー石が無いッツーー！」

冬流は、このバッグの中に確かに秘石を入れた自覚があった。

「チャッピー その首輪ステキ 」

チャッピーは、何時の間にか秘石の付いた首輪をしていた。

「そ・れ・よ！それ！」

冬流は、チャッピーの首根っこを掴んだ。

カプ

チャッピーは、冬流の左手を強く噛んだ。

「イッターーーーーー！」島中に冬流の叫び声が響く。

「まつたく礼儀を知らん奴だナ。」

「た……頼むからその石を返してー何でもするかーひー。」

「やうか……じゃあ体で払つてもいいおつ。」

「え？」

冬流は、パプワの言ひていい意味がわからなかつた。

「その前に服だけ着替えて良いかしら？」

「ああ良いぞ。」

パプワが言つと冬流は、高校の制服のままでは南国の島で汗塗れになると考え木々が生えた草原に隠れて着替えた。

「出来たわよ。」

冬流は、バッグの中から着替えの服を取り出した。

上が黒いタンクトップで下がジーパンに靴が制服の時に履いていた長いブーツだった。

岩と岩が囮まれて火が付いている上に巨大な貝を置き水を入れて湯を沸かした。

「しつかり沸かせよ。」

パプワとチャッピーは、貝に入った湯の中に入った。

「はい…ふーつ！ふーつ！（体で払えって、）」（うめつ事だったのね…）

冬流は、竹の筒で火の辺りを吹いて湯の温度を上げた。

シユツ…シユツ…

しかし、こう言つ原始的な風呂の仕方がわからない冬流は、貝の下にある火を消してしまった。

ばしゃーん！

「ええいぬるい！こんなぬるい風呂に入れるか……！」

パプワとチャッピーは、巨大な貝を卓袱台返しをした。

「風呂の温度は、41度！…そんな事もわからんのかあああ！」

「あああ！－すいません！－すいません！－！」

冬流は、頭をチャッピーに噛まれてパプワに謝った。

「もう一度ちゃんと沸かせよー。」

「は、はいーーー！」

湯が沸くまで遊びに出掛けたチャッピーとパプワに冬流が土下座をした。

「しくしくー。」

冬流は、泣きながら湯のやり直しをした。

ガサツ！

草むらに何かが居る事に冬流は、気付いた。

「誰！？」

「ふふふ…だいぶお困りのようね。」

草むらから女性の声が聞こえた。

「人間！？良かつた－この島にも人間が…」

草むらを退かすと大きなカタツムリが喋っていた。

「うわああああー妖怪——ツー！」

「失礼ね……」

逃げ去る冬流に呆れるカタツムリ。

「うわああああー！」

冬流は、遊んでいるパプワの元に走って来た。

「ビーした風呂は沸いたのか？」

「か…カタツムリが…カタツムリが…喋つて…いるの…！」

冬流がパプワに懸命に説明していると冬流の後ろの物に気が付いた。

「やあイトウくん。」

「はーい。パプワくん。」

パプワとチャッピーは、イトウくんに挨拶してイトウくんもパプワとチャッピーに挨拶をした。

「し…知り合いなの？」

「大の仲良しだ！」

「しゃ…喋つていたわよー！」

「いの島の生き物はみんな喋るやー！」

パプワが言うと周りから馬やコアラ、ハエも人間の言葉を喋つていた。

「何なのー?」の島——ツ——

「うぬせこ女だな。」

しばらくしてパプワは、冬流を自分の家に案内した。

「おいー!呪し使い夕飯は、まだか!」

パプワは、イトウくんも食事に誘つていた。

(呪し使い…)

冬流は、泣きながら夕飯を作る。

「ねえパプワくん? 彼女なんて名前?」

「おい、お前なんて名前だ?」

「冬流。」

冬流は、パプワ達に教えた。

「フコルだとー!」

「やーねアウリコウよー!」

「冬流よしつ……それよりも頼むからあの石を返してッ！私は、急いで日本に帰らなきゃいけないの……」

「帰ぬ？ビーやつて帰るんだ？」

パプワは、質問した。

「えつ……？船か飛行機で……」

「ハラオキ？ハラオキってなんだ？」

冬流は、不安の冬風が吹いた。

「ハラオキの何だけビ。」

冬風は、バッグから筆記用具とノートの紙を使い飛行機の絵を書いた。

「あーそれね。」

「此処で待つてると来るべー。」

「え……本当にー（せつたー）これで日本に帰れるー。」

冬流は、ウキウキしながら待つてることから翼が羽ばたく音が聞こえた。

「つて何なのよしつ……」

空から巨大な鶏が空を飛んでいた。

ガシッ！

「えつ？ キヤアアアア！」

巨大な鶏は、パプワと冬流を足で掴むと空に飛んで行った。

「もしかして…これもアンタのお友達なの？」

「その通り。」

巨大な鶏の背中に乗つて冬流とパプワは、会話をした。

「後どのぐらいお友達いるの？」

「たくさん。」

冬流は、こんな常識外れな生き物が喋っている所を想像したくなかった。

「あ！ そおそお、言い忘れたが。今日からお前も友達だ！ 人間じゃあ始めての友達だからなありがたく思えよ！ 仲良なくやろーな！」

こうして私は、橘高冬流と南国の少年パプワと愉快な仲間達の生活が始まった。

まつじやパプワ島に冬流りやん（後書き）

次回は、冬流がパプワ島の1日を書きます。

働く冬流ちやん！（前書き）

アスラクライン関係の言葉が出て来ます。

働き冬流ちやん！

南海に浮かぶ絶海の孤島…パプワ島

そんな朝からの日常を説明しよう。

パプワくんの家では、外でパプワくんとチャッピーが朝の体操をしてくる。

「おこひちりシ・セセシシ・ヒイヒイ・セセシシ・

するヒパプワくんとチャッピーは、槍を持って躍り出した。

「んばー・んばー・めいひめー・」

一緒に踊っていたパプワくんだがチャッピーを丸太に縛りながら持つて踊った。

「はつはつはつはつー今口も高知屋市名物シットロト舞つ北欧風は、絶好調だねチャッピー。」

「わう。」

「こじてもトオルは、まだ起きたのかー起しなねーー。」

パプワくんとチャッピーが、冬流の寝てこむパプワくんの家に向かつた。

パプワくんの家では、夢の中に冬流がいた。

冬流は、夢の中で秋希と小太郎の夢を見ていた。

(お姉ちゃん…)

(冬流)

夢の中の秋希と小太郎は、遠くから冬流に手を振っていた。

「秋希ちゃん！小太郎！私日本に帰つて来たわよ！この石さえあれば私達幸せに暮らせるわ！」

冬流は、秘石を持つて秋希と小太郎の元に行つた。

(お姉ちゃん!)

(冬流！)

小太郎と秋希は、何時の間にか冬流の懷にいた。

一 小太郎！秋希ちゃん！』

シユツ！

ブワゴッ！

二人は、冬流を力一杯蹴つた。

「ん……」

田の前にま、パプワくんとチャッピーが棍棒で冬流の顔を殴りつとした。

「わあああ！」

冬流は、咄嗟にパプワくんとチャッピーの棍棒を避けた。

「何時まで寝ているんだ。起きろ。」

パプワくんは、冬流に棍棒で当たられなくて悔しがった。

「や……夢?」

「わつわと支度をしろ! 朝食を取りに行くぞ……」

冬流は、現実じゃない事にガツカリしながら支度を始めた。

出掛けの前にパプワくんは、冬流に大きい籠を持たせた。

「こんな大きい籠を持つて何を取るの?」

「いいからついて來い。」

パプワくんとチャッピーに連れられて向かう籠を背に乗せた冬流。

着くと田の前にま、高い断崖がそびえ立っていた。

「やー登るやー!」

「う・うセ…」

冬流は、悪夢だと現実を受け止めて岩山を登った。

「な…なんで私がこんな事を……」

冬流は、岩山の麓んだ場所を見つけて懸念品に登りだした。

「ちゃんと一本の足で歩かんか!」

パプワくんは、岩山を足一本で登っていた。

「妖怪がアソタはツツ…！」

冬流は、岩山を足一本で歩くパプワくんに驚いた。

そしてようやく岩山の頂上に到着した。

側を見ると巨大な卵があった。

パプワくんは、巨大な卵を籠に乗せると冬流に背負わせた。

「じゃ帰ろオカ！」

「結局私が持つのね……ん！」

冬流は、諦めて岩山を降りようとするといつも岩山の巨大な鶏が冬流達を追いかけて来た。

冬流は、死ぬ氣で若山をパープワくんと同じように走った。

「やれば出来るじゃないか！」

冬流は、冬櫻を持っていた事を忘れながら巨大な鶏から逃げられた。

此處まで来ればたいじよ二十一

パプワくんとチャッピーは、卵を茹で始めたがまだ冬流は、息が苦しくて動けなかつた。

「おりよーり お料理」

卵は、茹で上がりばかりくんとチャッピーが食べ始めた。

「食へんのか？」

ハハハハハ
また鳥が苦で食へぬなし冬流は置いた

一 食欲がないわ……」

「されどね黒の眞似を貰でヤハナ！」

パプワくんは、何時の間にか斧を取り出しチャッピーも手術の衣装を着て両手にメスを持つていた。

「いいえ！ いただかせていただきまわつシッ！ 」

冬流は、恐くなり苦しくても卵を食べ始めた。

しばらくして卵は、すっかりパプロくんやチャッピーに冬流が食べて殻だけに成った。

みんな卵を食べ終わり一時の休憩タイムを取っていた。

しかし冬流は、卵を取つて汗を搔いていた。

ねえバブワ。

「なんだ？」

「近くに温泉とかある?」

冬流は、汗を流したかつた。

「あるぞ。行くか?」

「ええ。」

パプワくんは、冬流を温泉に連れて行つた。

森の中に温泉がありパプワくんは、腰パンツを脱いで温泉に入つた。

冬流もパプワくんが子供と言う事もありその場でタンクトップとズボンを脱いで髪も後ろにまとめて温泉に入った。

「ふーつ 極楽、極楽 」

冬流は、温泉で汗を流して気持ちよかつた。

パプワくんが冬流の顔を見た。

「なんだそのひたいに書かれている物は？」

パプワくんが冬流の額に書かれている『EX-106』と書かれた物に興味を持った。

「これは…罪人の証よ…大切な家族を失つた…」

パプワくんは、冬流にこれ以上聞かなかつた。

しばらくして汗を流し着替え終わつた冬流を見たパプワくんは、空を見た。

「そろそろ…昼食を穫りに行くか！」

「つてさつさ食べたばかりじゃない！」

「お天道様が真上だから昼メシの時間だ！行くゾーーー！」

「わーーーーー！」

パプワくんは、冬流を縄で縛ると引っ張りながら昼食を穫りに行つた。

そんな姿を木の影から人影が隠れていた。

「ふ……落ちたもんだな……冬流。秘石を持つてガソノマ団から逃げ出すとはバカな女よ。」

人影は、男で髪が長く冬流よりも年上であった。

腕には、『マジック』と英語で書かれた名札を付けていた。

「おめは、このミヤギが倒してやつかんナ。」

続く……

働く冬流ちゃん！（後書き）

次回は、東北兄ちゃんミヤギが出て来ます。

東北少年ミヤギくん登場

前回から冬流を監視している東北ミヤギが動き出す。

「ふ・・・原始的な島だべ。」

ガサツ

草むらからサーベルタイガーが現れた。

「ガオツ！！」

サーベルタイガーは、ミヤギに襲い掛かった。

シユツ！

ミヤギは、背中に背負っている物を抜いた。

サーベルタイガーの胸の辺りに「猫」と書かれた文字が現れる。

「ニヤオ～～ン？」

サーベルタイガーは、文字の「猫」に何故か変わってしまう。

ドン！

ミヤギは、蹴り上げるとサーベルタイガーが逃げて行く。

「くく・・・覚悟しどけヨ冬流！おめは、この東北ミヤギが倒してやつかんナ。」

ミヤギは、不敵に笑う。

「しつかり洗えヨ。」

「うう・・・」

パフワくんの家では、冬流がこき使われていた。

「アンタ腰ミノしか付けていないのに何でこんなに沢山あるの?」

「ふふん甘いナ!僕は、おしゃれさんだから一日に七回パンツを履き替えてるのサ。」

「誰も見ないわよそんなモノ。」

ガブツ!

「ギヤアアアアア!」

冬流の頭をチャップーが噛む。

「おまえは、まだ自分の立場が解つとらんナ。」

「アアツー！」めんなさこじ「主人様——ツ——！」

等と言ふ冬流は、パフワくんとチャツピーにじられていた。

「あ・・・あが冬流！？」（信じらんねエ！GDとガンマ団ノ。・。1のアノ人斬り橋高があんなガキにパシられてるとは・・・。）

ミヤギは、睡然と見ている。

「フハハハハ・・・・！勝てる・・・勝てッぞ！—冬流！おめを倒してオラがナンバーワンになるッツ！—！」

自信満々ミヤギは、大声を出す。

「何がよー！」

「べし！」

「い、いつの間にツツ！—！」

冬流は、ミヤギの背後から冬櫻を使つて彼の頭を殴りつける。

「あれだけ大声出せば気付くわよ。」

冬流は、ミヤギの事を馬鹿と思っていた。

「アンタ、ガンマ団の刺客なの？」

「ふつふつふつその通りだべ。」

頭から血を滝のように出しここる//ヤギ。

「裏切り者冬流。おめを連れ戻して秘石も貰つぞ！」

「つまりパフワ島の一員になりたいやーことだな？」

「ちがーう。」

ミヤギは、パフワの答えに舌打。

「悪い事は、言わないわ・・・」の島から出で行きなぞー。」

ミヤギは、冬流の予想もつかない答えに驚く。

「ふやけってねエー勝負を捨てて逃げッ氣かー！」

ミヤギは、冬流に對して抗議する。

「早くしないと私の様な田舎者よ・・・」

ガブツガブツ！

冬流は、涙を流しながらチャッパーに囁まれている。

「と、とにかく秘石を取り戻さん事には、歸るわけにいかねエー！」

ジャキン！

ミヤギは、ポケットから銃を取り出した。

「死ねハハー！」

ミヤギは、銃を冬流に向ける。

シコツーバ！」

冬流は、素早くミヤギの懷に入り拳で下腹を殴る。

「何度も言わせないでよ・・・早く島から出なさい。」

冬流の瞳孔が開く。

「ハハ・・・・」

ミヤギは、口から血を流して下腹に手を当てる。

「ゆ・・・許さねーー許さねゾー！オメエ等ー！」の東北ミヤギを憑鹿
にじやがつたなあーー！」

ミヤギは、背中にしおりしている物を抜く。

「何大声で田舎自慢しどんだ？」

「名前だベーツー！」

ミヤギは、パフワに突っ込む。

「オメエ等皆殺しにしてやッかんナ。」

ミヤギが抜いた物は、竹刀と同じ大きさの筆の剣だった。

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

冬流達は、ミヤギの武器に不思議がる。
「アンタ今の自分の姿に疑問はないの？」

「うぬせこしちーー聞いて驚くでねHーー」れは、中国二千年の歴史
の武器！「生き字引の筆」だあああー！」

「姿だけでなく名前までハズかしい武器だナ。」

「せつとこじよしちーー。」

ミヤギは、パフワにバカにされて悔しがる。

「何なの？それで書道でもするの？」

「ふふふ・・・その通りだべ。」一風になしちーー。」

シユツ！

冬流のシャツには、「蛙」と書かれていた。

「げ・・ゲロ・・・ゲロゲロゲー口。」

冬流の体が緑色に成り蛙の様な動きをしながら何処かに向かって行
つた。

「はーつはつはつーー」の筆は、相手を書いた文字の物に変えてしま
うんだべー！」

「じゃあ、この南米産のベルツノガエルをイリオモテテナガコガネに「変えてビーストベー！」

ミヤギは、またパフワに突つ込む。

「小僧、次はお前の番だべ！」

ミヤギは、パフワに生き字引の筆を振る。

ぴょい！

ぱつ！

ペーッ！

しかしパフワは、軽々と避けて行く。

「くそ~~~~~ッ！ ちよこまかちよこまか逃げおつてえ~~~~~！」

ミヤギは、息が上がっていた。

「行け！ チヤッピー！」

がる！

チヤッピーは、生き字引の筆を持つミヤギの腕を噛んだ。

「だア~~~~~！」

ミヤギは、手から血を流して痛がる。

「えりこぞチャッピー。」

ミヤギの腕から離れた生き字引の筆を持つてパフワがチャッピーを
薦める。

「そーて今度は、僕の番だぞ。」

ミヤギは、窮地に追いやられる。

シユツ！

ミヤギの上着に「サル」と書く。

「く・・・・・くくく。」

「？」

パフワは、何かおかしい事に気付く。

「馬鹿たれ！ その筆は、漢字で書がねと効果ないべーー。」

パフワくんは、漢字が書けない。

無論チャッピーは、字が書けない。

「あー返して貰つぞシッ……はああッ……。」

ミヤギは、生き字引の筆を奪おうと駆け寄る。

ガシッ！

ミヤギの腕に誰かの手が止めた。

「冬流……」

冬流は、びしょ濡れの姿でいた。

「蛙になつて池に飛び込んだお陰で文字が消えたわ。」

そう生き字引の筆は、あくまで筆なので水に浸けると消えてしまい欠陥があった。

「いやア・・・すつかりお世話に成っちゃったわね。カモーーン。
ミヤギひやあーん？」

冬流の顔は、笑顔だが目が笑っていない。

翌日

「セー 今日も食料を探しに行くゾー！」

「ええ 」

何時もの日常に成っていた。

「つとその前にー。」

みんな別の場所に移動した。

「ミヤギくんに水をあげなきやねー！」

「大きく育ちなさい。」

ミヤギは、先日冬流達にボコボコにやられて「植物」と書かされボーズがグリコのイメージ絵の様に成っていた。

東北少年マガジン登場（後書き）

次回は、忍者トシトロくん参上――！

忍者トシトリ参上！

南海に浮かぶ絶海の孤島パフワ島。

今日も何時も通りパフワくんとチャッピーは、遊んでいる。

「あちよーつーあちよーつーはちよーつー！」

パシ！

ピシー！

パフワくんの飛び蹴りをチャッピーは、左右の手で見事に防ぐ。

「北海道釧路名物タンチョーヴル！」

プス！

パフワくんは、何処からかタンチョーヴルを出してタンチョーヴルがチャッピーの頭を強く突いた。

「ぐうーん！ぐうーん！」

チャッピーは、痛がつている。

「『めん』めんチャッピー！ウイット」とんだアメリカンジョークのつもりだったんだヨー！」

パフワくんは、チャッピーの介抱をする。

「べつせんさんパフワくん。」

「おおー、イトウ君ー。」

パフワくんは、イトウ君がまつて来た事に気付く。

「今朝も韓国伝統武術テコンドーが絶好調ね。」

「はつはつはつー、後ろ回し蹴りがポイントさー。」

パフワくんは、イトウ君にテコンドーの基本を教わる。

「じりじりでたら流せん面なん?」

「アッシュなら家のセーリジしてるゾー。」

「ありがとうパフワくん。」

イトウ君は、そのままパフワくんの家に向かつ。

パフワくんの家の中では、掃除を懸命にするタフ流が居た。

まあ当然だとは思つがサボつたらまたチャッピーに噛まれるからでもある為従つていろ。

（待つていてねコタローー秘石を取り戻したらお姉ちゃん必ず日本に帰るからね！…）

「それにしても・・・」

冬流は、ポケットからコタローの写真を見る。

「本郷に可愛い弟？」

「本郷に可愛い弟を・ん・ね？」

後ろからイトウ君が眼球の血管を見る位真つ赤にしながら興奮した口調で冬流の後ろにいる。

「こきなつ近づかないでよー！それとコタローの写真を見て溼らしく興奮するな雌雄同体！」

冬流は、冬櫻の峰打ちの辺りでイトウ君を半殺してた。

「おーーー！そーじは終わつたか？」

パフワくん達が家の中に入つて来た。

「ん・・・ええ全部済んだわよー！」

するとパフワくんとチャッピーは、家の壁を触った。

「まだホコリがついている・・・」

パフワくんとチャッピーは、湯のみにお茶を入れると不機嫌に言つ。

「小姑ですかあ！オノレはッ！！」

「もう一回やりなおしね。」

パフワくん達は、外に出た。

「うう・・・」

渋々冬流は、掃除を再開し始めた。

キラッ！

「んー？」

冬流は、窓を掃除していると空が光る。

次の瞬間！

ギュルルル！

空から無数の手裏剣を冬流に掛けて来た。

「うわあー！」

冬流は、ギリギリ避けた。

「はあっー・ガンマ団ー..?」

冬流は、外に急いで出た。

「おこー・こなーだの//ヤギといこガンマ団ひてなんだ?」

パフワくんは、冬流に質問した。

「世界最強の殺し屋軍団よー私の命と秘石を狙つてこるねよ。。。。。
・?
・?」

冬流は、振り向くと大きな草の塊があつたが無視して話し続ける。

「一体何処に隠れてこるのよッー・・・・?」

ピタッ!

草の塊は、冬流に見られながら止まる。

冬流は、草の塊に近付くと忍者のコスプレをした青年がバレバレの草の塊に隠れていた。

「誰よアンター!」

「あーさすが冬流!よー見破ったがなー!」

「ふざけたの?」

青年は、冬流の質問を無視しながら話し続ける。

「ガンマ団第一の刺客・忍者トットリただ今参上……」

トットリは、自分でカッコいとと思つたポーズを決める。

「あれが世界最強の殺し屋軍団か?」

「ちよつと自信……無いわ!」

「セイだー! ヤギ君はどうしたツ! ?」

「ん? ヤギ? 奴ならあやじで光合成立るゾ!」

パフワくんは、前回冬流に半殺しられたヤギ君をトットリに見せた。

「おお、ーああ! ヤギ君ツーー! げに青々としてツツー!」

「秋だから実でもつけるだろオ。」

「ゆ・・・許せんジオー! オも僕のベストフレンド! ヤギ君をオオ

! ! !

トットリは、目から殺意を満たしてパフワくん達に睨んだ。

「くらつてみーーツー! ツトリ忍法水龍巻ツツ!」

大量の水が冬流を襲おうとした・・・・・・が?

「いひー!」

冬流の田の前には、ホースを使って水を出している姿しか無かつた。

「アンタ忍者でしょ！？地面割つたり水柱ぐらい立たせんかツツ！」

「誰がそげなモン絵に書くだや……」

冬流の突つ込みにトツトリは、言い返せなかつた。

「そいなら火炎の術はどげだツツ！」

トツトリは、馬鹿デカイマツチを持つて火を着けた。

バシャツ！

パフワくんは、さつきトツトリが使つていたホースを使つてトツトリ掛けで水を出した。

「ひ・・・卑怯だゾ！人の武器を使つやなんて！」

「そんなモン武器にするなツ！」

パフワくんは、アホなトツトリに突つ込む。

「アタシもナメられたモンね・・・・こんなアホをよこせるとは・・・やられたく無かつたら帰りなさいツツ！－！」

「ちいとおちやめな一面のぞかしたけんてそげに気に入らんだったかあ・・・・・ほいだつたら本氣をだしてやつわア－いでよ！脳天氣雲ツ！－！」

するとパフワくん達の真上に変な雲が現れた。

「な・・・なに？」の雲は！？」

「ふつふつふつこいがトツトリ忍法奥義！天変地異ゲタ占いの術ツズバアツ！」

トツトリは、自分の履いているゲタを飛ばした。

ズバアツ！

トツトリは、下駄を飛ばすとカミナリと書かれた文字が見えた。

ドッカアアアアアアンンン！！

脳天氣雲から凄まじい雷がパプワ達に落ちた。

三人は、体が真っ黒焦げに成りチャッピーと冬流は、動けないがパワくんはと言うと・・・・・

「わーい！カミナリカミナリ。」

予想も出来ない事に平氣だつた。

「説明すつぞーこの術は下駄あじわが表しちょー天氣を脳天氣雲に実行させる技だわやツ！」

「よーするに、あーした天氣になーれ！、なろうオガ。」

「そげに言われたらミモフタもあらせんわナ。」

考えればその通りだつたりする。

「氣イを取り直して次のお天氣いつてみッビーッ！！」

トツトリは、再び下駄を飛ばす。

ポテ！

今度は、ヒヨウと掛かれている。

ヒヨオオ！

「うわああああツ！..！」

脳天氣雲から巨大な雹が大量に降つて来て逃げるパプワくん達。

「ははは！逃げれ！逃げれ！裏切りモジ者がアツ！..！」

トツトリは、愉快そうに言ひ。

「ちーいッ！..池に飛び込むわよッ！..！」

冬流は、池に飛び込むとするといふ……

「はーい パプワくんお元氣い！」

巨大な網タイツを足に付けた鯛が現れた。

『ん！

鯛のタンノくんは、巨大な雹に当たり池の上で浮いて氣絶していた。

「な・・・なんだあかあの魚は・・・!?

トツトツリは、タンノに氣をとられていた。

一隙ありッ！冬櫻抜刀！」

!

ホイッ！

エッエラセ、下駄を軽く飛ばすと缶風と書かれた文字がある。

ט' ב' ת"ה, ט' ב' :

卷之三

体制を直さなければ真正のエコへんが图れ

冬流せやあん？私の胸に飛び込んできて……!!

何故か興奮気味の1トピック

イエカくんの所に当たる成る寸前で行き成り曲がり隣の樹に当たる冬流。

いたあ

冬流は、頭に大きなタンコブを付けた。

「ああー冬流ひやん……慣性の法則を無視してまでシッ……」

イトウくんは、急いで冬流の手元でをする。

「」「ドーンを越えた奴……」

トットリも睡然として冬流を見る。

「とじめのお天氣いくじょ……」

トットリは、下駄を飛ばす。

シユツ！

「一」

チャッピーが下駄が地面に着く前にキャッチした。

「えらいぞチャッピー。」

パップくんは、チャッピーを讃めると下駄を持つ。

「なるほどこんな天氣が書いてあるナ。」

「返せやマーマーッ……」

トットリは、駆けつて来る。

「田畠つ。」

ピカ！

トツトリは、高温で焼けている。

「大雪。」

ヒィュウウウ・・・・・

今度は、凍り付く。

「南国少年パプワくん作者の故郷長崎名物洪水波浪注意報！」

「ああーお盆の後は、クラゲが多いツツ！-！」

トツトリは、洪水に流されながらクラゲの大群に捕まる。

「じゃーーするとビーなるかナ？」

パプワくんは、下駄を角度ある所を地面に刺す。

「あ、あツー！そいはアーツー！-！」

脳天氣雲の様子がおかしくなる。

「いけんツー！脳天氣雲が混乱し始めちょーツツ！-！」

ピカ！バゴオオツー！

脳天氣雲は、爆発して消えた。

「この
だらずがアー！」

だらずとは、鳥取県でアホか馬鹿と言つ意味。

トツトリは、クナイを取り出す。

「くだばれ！！このクソガキッ！！」

エジエラは、ハトちゃんの所まで走り出す。

「アーティスト」

ズコ！

冬流は、冬櫻を鞘に閉まつたままトヅトリの頭を後ろからフルスイ
ングで殴る。

文二

シテ、氣總した。

「すまんナ。」

ハラハラくんが冬流に驚いた

「別にアンタ達を助けた訳じゃ無いわよ。」

冬流は、格好付けた。

「チャッピー餌！」

「わう！」

カプツ！

チャッピーは、冬流の頭を力一杯噛む。

「いや・・・君を助けたかったんだヨうんー・パプワちゃん。」

「人間素直が一番！」

（可愛くない奴ね！）

冬流は、頭から血を吹きながら思つ。

「ありがとナ。」

「お礼なら石を早く返してヨ。」

「だーめ。」

パプワくん達は、家に帰つて行つた。

忍者トチトリ参上！（後書き）

次回は、冬流が髪を切る？話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906i/>

南国少年パプワくん アスラクライン

2011年2月7日01時41分発行